

博士学位論文審査要旨

2019年1月9日

論文題目： 前期フィヒテの意志論の全容

学位申請者： 櫻井 真文

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 田端 信廣

副査： 文学研究科 教授 林 克樹

副査： 文学研究科 教授 中川 明才

要 旨：

本論文は、J・G・フィヒテの実践哲学の枢要を形成している意志論を、『あらゆる啓示の批判の試み』(第二版、1793年)から『知識学の諸原理による道德論の体系』(1798年)までのテキストに即して、詳細に追跡、検討することによって、フィヒテのイェーナ期の意志論の展開・発展過程を系統的に明らかにした。その際著者は、とくに各時代ごとの意志論の連関と相違を解明することに力点を置き、その解明を通してイェーナ期フィヒテの意志論の発展過程を明らかにすることに成功している。

本論文の大きな特徴は、フィヒテ研究において従来は独立に論じられる傾向のあった「意志」論と「衝動」論を一体のものとして論じている点にある。「意志」論が「意志」の本質規定やその抽象的機能の解明にとどまることなく、行為における「意志の発現様式」をも明らかにすべきであるとすれば、「意志」論は不可避的に「衝動」論を必要とする。意志は衝動を媒体にして発現するからである。その際、著者が明らかにしようとしているのは、次の点である。すなわち、フィヒテは、カントの「純粋意志」の理念を継承し、これを保持しながらも、「純粋意志」が具体的行為においては「衝動」を媒体にして働くこと(「純粋意志の感性化」)を詳述することで、ややもすれば内実を欠いた形式的、抽象的な意志とみなされてきたカントの「意志」論を補完し、それを具体化しようとしたことである。この点で、著者は、カントの「意志」論と対比して、フィヒテの「意志」論の基本的特徴を描き出すことに基本的に成功している。

フィヒテにおいて、「純粋意志」は実践的自我の能動的契機であり、「衝動」はその受動的契機であるがゆえに、「意志」論と「衝動」論を統合的に論究している本論文は、実践的自我の能動性と受動性の統合という、フィヒテ自我論の根本的問題を具体的に解明することにも一定の寄与をしている。個々の論点については、なお論述を精緻化すべきであるという課題を残しているが、総じて本論文は、イェーナ期フィヒテの意志-衝動論の全容を解明するという意欲的課題を十分に遂行している。

よって、本論文は、博士(哲学)(同志社大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2019年1月9日

論文題目： 前期フィヒテの意志論の全容

学位申請者： 櫻井 真文

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 田端 信廣

副査： 文学研究科 教授 林 克樹

副査： 文学研究科 教授 中川 明才

要 旨：

上記審査委員3名は、2019年1月9日、午後1時から約2時間にわたり、徳照館2階第1共同利用室において、学位申請者に対して口頭試問をおこなった。

学位申請者は、提出論文の内容に関する各審査委員からの質疑に対して、的確かつ詳細な応答をおこない、その結果、本論文の学術的価値と申請者の学力水準の高さがともに証明された。

口頭試問に先立って午前11時からおこなわれた語学（英語、独語）試験においても、申請者が十分な語学力を備えていることが確認された。

よって、本論文に関する総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 前期フィヒテの意志論の全容
氏名： 櫻井 真文

要旨：

本論文は、ヨハン・ゴットリープ・フィヒテ(Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814)の哲学、特に彼の前期思想において意志論が体系上中心的かつ原理的な位置を占めることを踏まえ、その意志論の全容を解明することを主題とするものである。そもそも私たちは自らの意志を通じて何をなすことができ、何をなすべきであるのか。フィヒテが生きた時代において、既存の権威や伝統といった中世以来の価値観は必ずしも人々に人生上の明確な指針を与えるものではなかった。むしろ理性の光のもとで人間を種々の束縛から解放しようとするドイツ啓蒙思想は、人間存在を自由な理性的存在者として規定したうえで、その必然的な行為様式である義務を解明することを通して、私たち人間が何をなすべきなのか、という問いに答えようとしたのである。この啓蒙思想の流れの中であって、インマヌエル・カントは、フィヒテに先立って、人間の理性能力に関する批判的考察を通じて、理性的存在者の本質が「自由」であることを洞察するとともに、人間の一切の活動領域を貫く自由の実現ないし徹底が理性的存在者の義務であることを主張した。フィヒテはこのカントの義務に関する主張を一方で受容しながら、他方において次のような疑念を抱かざるをえなかった。すなわち、カントは理性的存在者が自由であることの原理的な特権性を強調するあまり、自由の実現を制約するものについては充分には論じ尽くすことができていないのではないか、という疑念である。従ってまずもって問われるべきは、自由の実現を制約するものとは何か、ということである。

カント哲学の精神の継承者を自負するフィヒテは、自由が理性的存在者にとって異質なものであることは決してなく、むしろ、欲求能力として特徴づけられる「意志」に基づくものであることを主張する。理性的存在者は経験を通して様々なものを欲求し、その限りで経験的に見出される欲求の対象に拘束されている。しかし理性的存在者はまた個々の欲求の根底にあって、一切の経験に左右されることのない絶対的自由を欲求するものでもある。フィヒテによれば、理性的存在者は絶対的自由への意志を根源的にもつ。もちろんこの場合の絶対的自由は端的に実現されるものではない。そこでフィヒテが「知識学(Wissenschaftslehre)」という名称のもとで哲学体系を構想し、その哲学体系に対して統一を与えるものとして意志論を設定するとき、彼は意志がいかんにして発現し、いかんにしてその絶対的自由を実現するのかを問うのである。そこで本論文が試みたのは、前期フィヒテの意志論の全容を解明すること、すなわち、意志をただ単に理性的存在者の欲求能力として概念規定することに留まらず、意志がその発現においていかなる様式をとるのかを究明することであり、この試みを通じて最終的に、人間存在固有の行為様式についての洞察を獲得することを目指した。

フィヒテによれば、理性的存在者の意志が無媒介的に発現することはあり得ない。というのも、理性的存在者は他方で自然の一部であるため、その意志の発現は常に経験的なものにより制約されざるを得ないからである。そこでフィヒテは知識学のうちに、意志と世界を結びつけるものとして「衝動」概念を導入することにより、意志の発現様式を解明する。ただし従来のフィヒテ研究では、その衝動論は実践哲学の特殊領域に属するものと考えられてきたため、知識学の体系構想全体をほとんど考慮に入れない仕方で研究が進められてきた。例えば W. G. Jacobs は *Trieb als sittliches Phänomen* において、知識学に登場する多様な衝動概念を分類することにより、衝動論をフィヒテ研究の一分野として確立するという貢献を果たした。しかし Jacobs は意志と衝

動の連関を明瞭に提示しなかったため、衝動論の体系的な位置は不明瞭なままに残されることになった。またフィヒテの意志論の記念碑的研究としては、G. Zöller の *Fichte's Transcendental Philosophy* が挙げられる。しかし Zöller もまた、意志を概念規定することに研究の焦点を絞り込んでいたため、意志の発現様式を十分に解明するには至っていない。本論文の特徴は、意志論の完成を担う部分として衝動論を読解することにより、フィヒテの哲学体系における意志論と衝動論の密接な連関を明示する点にある。

なお本論文では、具体的な義務の生成を解明することを最終目標として定めるがゆえに、考察対象を 1792 年から 1799 年までの間の「前期」フィヒテに限定するとともに、同時期のフィヒテの思索の深まりを追跡し、その意志論の成果と課題を究明するという手続きを採用した。この手続きに従った論述は七つの章から成り立っており、各章においてそれぞれ以下のことが論じられた。

第一章「前期フィヒテの意志論の基本構図」では、『あらゆる啓示の批判の試み』の「第二版」(1793 年)における意志論の端緒が論じられた。意志が行為という結果をもつためには、感性的衝動という媒体を必要とする。他方、意志は根本的には道徳法則により規定されているものとして、端的な正しさを目指すものである。そもそも意志は感性的衝動を媒介にして発現しうるものなのか。この章では、衝動を介した意志の発現という、意志論の基本構図が明らかにされた。

第二章『全知識学の基礎』の到達点」では、前期知識学の代表作である、『全知識学の基礎』(1794/95 年)における知識学の全体構成について論じた。フィヒテは自らの哲学体系を「知識学」と呼称し、その自我原理への洞察に基づき、認識論と行為論を展開している。認識論とは自我の非我による被限定性を解明するものであり、そこでは、客観認識が構想力に依拠して成立することが論じられる。それに対して行為論とは自我による非我の限定性を解明するものであり、そこでは、実践的行為が努力に依拠して成立することが明らかにされる。この努力の生成論的演繹を担う部分として、フィヒテは衝動論を展開する。この章では、『基礎』における衝動論の体系的な位置を検討することで、理性的存在者が自由を目指す衝動としての「憧憬」をもつ意義が究明された。

第三章「フィヒテによるカント哲学の精神の継承」では、意志論の構築に決定的な寄与を果たした、知識学の新しい方法論を検討した。フィヒテは『知識学への第二序論』(1797 年)において、経験の反省的抽象と生成論的演繹から成る二段構えの方法論に言及するとともに、知識学とカント哲学の連関を明示する。この章では、新しい方法論に従って思惟を徹底するかぎり、一切の経験に依拠することのない「純粹意志」を取り扱う地平が開かれることが確認された。

第四章『新しい方法による知識学』における目的概念の意義」では、理性的存在者の実践的活動が検討の対象とされた。フィヒテは前期知識学のなかで最も完成された叙述と見なされている『新しい方法による知識学』(1798/99 年)において、自我の本質を掘り下げるとともに、「衝動の感情」を出発点とした対象意識の生成論的演繹を遂行する。衝動の感情は自己外出の契機を理性的存在者に与えるものである。とはいえ理性的存在者は単に衝動を感じるだけに留まらず、目的概念を構想するという仕方で、この感情を明瞭な意識へと高めることができる存在者である。この章では、目的概念の構想が対象意識を可能にすることが明らかにされ、その構想には実践的契機が含まれていることが指摘された。

第五章『新しい方法による知識学』の意志論」では、「純粹意志」概念がいかなるものであるかが究明された。意志は、個々の欲求の根底に存するア・プリオリなものとしては、「純粹意志」である。フィヒテの言う純粹意志とは、絶対的自由という根源的目的についての知を自らのうちに含んだ意志である。しかし純粹意志が実在性をもつためには、世界におけるその発現様式が解明されなければならない。そこで「当為の感情」を介した純粹意志の感性化の過程と、感性化における理性的存在者の目的設定能力が不可欠であることが、この章では明らかにされた。

第六章『道徳論の体系』における道徳性の原理の演繹」では、『知識学の諸原理による道徳論

の体系』(1798年)の「第一部」における意志論の展開が論じられる。純粹意志の感性化は、純粹意志の発現様式を主題的に解明するフィヒテの道徳哲学において先鋭化される。フィヒテにとって道徳性の原理とは、意志の絶対的自由を思惟することである。この思惟構造は経験的諸制約に依拠するものではなく、自我原理に根拠づけられたものである。とはいえ道徳性の原理は、理性的存在者の行為様式を完全に規定し尽くすものではない。この章では、自己自身を自由な意志主体として思惟することが、あくまで各理性的存在者の引き受けるべき「実践的課題」であることが明らかにされた。

第七章「道徳衝動と義務」では、理性的存在者の本質をなす純粹意志の発現様式が検討対象となる。理性的存在者は自然の一部であるかぎり、「自然衝動」をもつ。自然衝動は純粹意志の発現の必然的制約であり、廃棄不可能なものである。他方で理性的存在者は意志主体としては、絶対的自由を目指す「純粹衝動」をもつ。この両衝動の統合形態が、純粹意志の最終的な発現様式としての「道徳衝動」である。道徳衝動は、特定の状況下での具体的行為を動機づけるものである。この道徳衝動を介して理性的存在者の「義務」が顕現すること、その義務が行為の吟味と実践という二重のものであることが、この章では解明された。

以上の考察を通じて、前期フィヒテの意志論の全容が解明されるとともに、意志論によって哲学体系が最終的な統一を得ることが証示された。この結論に依拠するならば、私たちは何をなすべきか、という哲学の根本問題に対して次のように答えることができる。すなわち、私たちは行為の道徳性の吟味と道徳的行為の実践という制約のもとで、絶対的自由の実現への道筋を理論的かつ実践的に模索していくべきである、と。